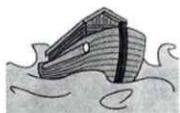


大学が廃校にされようとしています！



—11・3 同窓会総会にご参集ください—

▽新学部の設置方針が撤回されました

昨年の同窓会総会でも表明されたように、聖トマス大学は本年5月の新学部設置申請に向けて準備を進めてきました。ところが現学部の最後の卒業生を送り出して2週間足らず、新年度を迎えた翌日の4月2日に突然、ドーソン・スティープン・リン理事長は新学部設置申請を取りやめ「今後、聖トマス大学の廃止を含めて検討していく」と発表しました。

アメリカの投資会社ローリエット・エデュケーション社は、2010年10月、学校法人英知学院の存続と長期的な資金提供による新学部の増設を約束して、本学の経営に乗り出しました。しかしこの4年ほどの期間に、ローリエット社から派遣されたリン理事長が行なったのは、大きく2つのことでした。

▽グラウンド売却と不適切な運営

第1に、2度にわたる大規模なグラウンド売却による大学資産の散逸です。

- ①2011年2月に約10,000㎡を14億円で売却
- ②2013年6月に約6,000㎡を7億6千万で売却

第2に、日本の学校法令に反する数々の不適切な大学運営です。

- ①2011年5月、通常は複数年以上の十分な準備を経て行なう新学部設置申請を（経費がかかるとの理由で）わずか半年で断行し、その結果として書類不備・虚偽記載により文科省から2年間設置申請を禁じる嚴重な処分（ペナルティ）を受ける。
- ②認可された教育内容と関係のないローリエットの教育プログラムを収益事業として行なおうとして、巨額の資金を投じて改装工事・人員の雇い入れを行なった挙句、文科省から不適切な活動だとクレームを受け、ローリエット社に利益をもたらさただけで頓挫。無駄な経費を注ぐ。
- ③建学の精神と教育方針を完全に無視した風水の宗教施設の設置工事を、学内の「景観対応工事」として大学の公金を使って行ない、学生の苦情と教授会の抗議を受け撤去。

これらの措置に対し従来からの教職員は理由を説明して反対してきましたが、リン理事長は聞く耳を持たず、文科省からの処分と大学に対する甚大な損害をもたらすにいたりました。③の風水の設備設置が公金で行なわれた件については、経費の流れなどくわしい説明を教授会に拒みつけて現在に至り、本年4月から学長を兼任するようになったリン理事長は、教授会を開くことさえ拒んでいます。

その結果としての4月2日の大学廃校方針です。今回の新学部設置申請の断念は、2011年に文科省からペナルティを受けてから3年近くの準備期間がありながら学部設置を申請することもできない、大学経営能力の決定的な不備をさらけ出したものです。半年で出してはならないのですが、3年なら出さねばならないのです。

にもかかわらずリン理事長は経緯の説明を拒んだまま、雇用期限の定めのない教員4名全員に対して4月末の合意退職を要求し、これを拒むと10月末の解雇を通知してきました。現経営陣は教職員のほぼ全員を事前に追い出し、誰にも邪魔されずに来年3月に大学廃校を決定し、ローリエット社へ戻ろうとしているようです。

▽同窓会・(元)教職員・地域で納得のゆく説明を

ことここにたって、私たち聖トマス大学の教員4人と同窓会役員会は、平和祭など大学の地域貢献で協力いただいていた地元の方々とも連携し、法人に対しまず何よりも**十分な説明と経営責任の明確化**を求め、その上で大学の資産の適切な処理や卒業生としての権利保護を求めていくことで合意しました。

その手始めに、教員4名は解雇通知などの撤回を求め7月28日付で学校法人英知学院を提訴しました。新たな土地売却の話が聞こえてくる中、これ以上法人が好き勝手なことをするのを抑制するのが目的です。



同窓会役員は、つい先日9月末にも左近允準人・法人事務局長と面談しましたが、大学の今後について何度聞いてもノーコメントで、説明責任を認めませんでした。

11月3日の同窓会総会には左近允事務局長ないしリン理事長が挨拶のため出席することのことで、同窓会役員会は「今回の総会を傍聴参加自由の公開形式」とすることに決定しました。

近隣地域の皆さまは2009年の募集停止後もシンポジウム「ほっとけん！地域の大学・聖トマス大」をひらき、市長をはじめ100人以上の方が集まり学生・教職員を励ましていただくなど、これまで影に日向に応援いただきました。先日は市議会でも本学の行方が議論され、副市長からも懸念が表明されました。

きたる11月3日の総会では、卒業生や地域の方が納得できる大学の善後処理策を導き、来年も従来通りのホームカミングデーを実施するべく、一人でも多くの方にご来場いただき、理事長・事務局長に説明を求めたいと思います。学友・恩師などにお声かけの上、お集まりいただくようお願いいたします。

▽ご理解とご支援を！

顧みれば、学生募集停止を一旦決めた大学の再建にあたる現理事会に対し、私たちはできる限りの協力を行ない、個々人の利益はさし置いて大学再建に寄与することを願ってきました。また学生や卒業生が受けるショックを考え、現経営陣の不適切な大学運営を公表することも控えてきました。しかしその結果が、不適切な経営の責任を認めようとせず売れるものをすべて売り払って逃げるかのような理不尽な廃校方針です。

日本の私立大学は諸外国と異なり、文科省の規制のもとで補助金を受け「公教育の一翼」を担う公益法人です。ビジネスとして利潤追求を行なう経営手法で成長をとげてきたローリエット社は日本の特殊事情を理解せず、諸外国でのやり方に固執し、新学部設置計画を2度も失敗させました。

私たちの目的とするところは、廃校に向かうにせよ他の学校への譲渡にせよ、日本の大学として求められる「まっとうな」大学運営です。アメリカのビジネスマンに任せるのではなく、卒業生と教育人、地域の力で母校の学び舎を守りましょう！

各自仕事に追われつつの体制ですが、どうぞ同窓会ホームページなどのご連絡にご注目いただき、共通の目標の実現のために、ご意見やご支援をたまわりたく存じます。

なお、今後の動きについて1万の同窓生のみなさまに郵便などで連絡する資金も人手もございません。少ない人員でこれまでほぼ手弁当でやってきましたが、母校のためにカンパとボランティアのサポートを心よりお願い申し上げます。

同 窓 会 総 会
11月3日（月曜・祝日）
11時15分～
聖トマス大学 学生会館2F



初公判後会見を開いた聖トマス大学の岡崎臣博教授（右から2人目）ら（尼崎市役所）

聖トマス大教授ら解雇無効訴え
第1回口頭弁論で 大学側は争う姿勢

聖トマス大学（尼崎市若王子）から解雇通知を受け、大大学院教授ら4人が、学校を運営する学校法人「英知学院」を相手取り、解雇通知の無効確認などを求めた訴訟の第1回口頭弁論が16日、神戸地裁尼崎支部（西川知一朗裁判長）であった。同大学は定員割れが続くなどしたため、平成22年度から生徒募集を停止。大学廃止を検討するとの方針を明らかにしている。

原告側は、大学側は解雇回避努力を尽くしていないなどとしている。さらに、十分な協議がないまま10月末の解雇通告や休業手当のみの支払いは不当として、今年5月以降の未払賃金など計約2億182万7千円の支払いも求めている。同大学は、22年度から生徒募集を中止し、25年3月には学生のほとんどが卒業。現在、在学生はゼロとなっている。英知学院は、22年11月から財務状況改善のために米投資会社、ローリエット・エデュケーションに経営のほとんどを移管していた。

原告らは口頭弁論の後、会見し、岡崎教授は「大学側に説明を求めたが十分な説明はない。大学が今後どうなるのか裁判で明らかにしていきたい」と話した。同大学側は「事実関係については訴訟の場で明らかにしていきたい。現段階ではコメントできない」とした。

『産経新聞』2014.9.17 阪神版

同窓会役員：藤本滝三 篠原一夫 地村昭彦 武部宗晴 西川由紀子 野村 裕 和田 隆
教員：岡崎臣博 奥村三和子 竹内千代子 森 宣雄 名誉教授：井田規文 松本耿郎